

目次

研究発表大会報告	1p	大会優秀発表賞	14p
研究発表大会セッション報告	2p	ポスターセッション賞	15p
学会賞	12p	事務局からのお知らせ	16p

第34回研究発表大会報告

大会実行委員長：沖 拓弥

第34回学術研究発表大会を、2025年11月1日（土）・2日（日）の2日間にわたり、富山県富山市の富山大学五福キャンパスにて開催しました。大会の参加登録者は360名を超え、活発な議論が行われる盛況な会となりました。また、1日目夜の懇親会にも昨年を大きく上回る168名の方々にご参加いただき、旧交を温める場となりました。多くの会員の皆様にお越しいただき、ありがとうございます。合わせて、各セッションの円滑な進行に努めていただいた司会者の皆様や、各賞の審査にご協力いただいた皆様、そして、開催校として会場準備・運営にご尽力いただいた富山大学の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

本大会では、口頭発表88件、ポスター発表95件に加え、企画セッション（シンポジウム・ワークショップ・ハンズオン）14件が開催されました。1日目に『[FOSS4G分科会] FOSS4Gの現在地～FOSS4G Hiroshima 2026に向けて～』、『[教育委員会]2025年度GIS教育実践アワード 表彰式・表彰事例報告会』、『[若手分科会] 学生フリーテーマ発表会2025』、『[地方部の子ども]のActive School Travelをいかに支援するか？：地理情報科学とGISの可能性』、『[GeoAI分科会] GeoAIの最前線』、『第3回SIG-GISシンポジウム --- 我々は国際

標準の動向にCatch Upできているか』、『調査や研究をより効果的に！ArcGIS Online セッション』、『第3回GISA × MLIT's PLATEAU 研究会』、『人流データの分析、可視化の現状と研究活用』、『[教育委員会・自治体分科会] GISカードで考える新たな地域課題解決のアイデア ～「最初の一步」から「ローカライズ版アイデア創出」まで～』、2日目に『新しい空間データが切り拓く空間情報科学の未来』、『＜富山企画＞時間地理学の新潮流：富山市住民の日常生活行動分析』、『Metashapeを使った国土地理院空中写真からのDSM・3Dモデル生成』、『デジタルアース研究の現状と将来展望（2025）』が開催されました。

懇親会にて学会賞授賞式を行い、受賞者からご挨拶をいただきました。また、閉会式では、大会優秀発表賞10件、ポスターセッション賞10件、および、若手分科会から学生フリーテーマ発表会の優秀発表賞1件と奨励賞1件が授与されました。

来年度の研究発表大会は、2026年10月31日（土）・11月1日（日）に東京科学大学大岡山キャンパスにて開催いたします。来年度の大会でも、本年度同様、皆様の積極的なご参加・ご発表をお待ちしております。



富山大学五福キャンパス



懇親会の様子



閉会式

第34回研究発表大会 セッション報告

企画セッション (A-1)

(シンポジウム) FOSS4Gの現在地 ～FOSS4G Hiroshima 2026に向けて～

企画者/座長：岩崎亘典・瀬戸寿一・武内樹治

オープンソース地理空間技術に関する世界最大の国際カンファレンス「FOSS4G」が2026年に広島で開催されることが決定しました。これを受け、FOSS4G分科会では、同カンファレンスへ多くの参加を募るため、5つの話題提供を通じて、地図×オープンソースの最前線に関する最新の事例や知見を共有しました。

山本報告では、民間企業のオープンソースやそのコミュニティへの支援について報告され、民間企業によるコミュニティへの積極的支援のあり方やQGISに関する総合情報メディアやプラグインの公開によるユーザー拡大へ貢献している事例について提示されました。大丸報告では、森林分野でのオープンデータ化の流れについて報告者の経験にも紐づけて振り返り、能登半島の災害のオープンデータ活用への期待や課題について報告されました。特に公開されている高解像度DEMを用いて地形変化をFOSS4Gの利用によって個人であっても分析できることが示されました。川原報告では、富山でのUrban Data Challengeに関するデータ整備・分析の報告と、能登半島地震時にオープンデータとQGISが果たした役割と課題や、災害時に活用できるデータ構築について報告されました。データ構築は自治体からの提供一方通行ではなく、利用者也データ利用・フィードバックなど、データを育てていく意識が必要と強調されました。小林報告では、報告者の森林管理業務の研究で用いてきた地理空間情報のソフトウェアの変遷や、ソフトウェアの利点や欠点、特にQGISジオリファレンスのユーザービリティの改善案について報告されました。

岩崎・瀬戸報告では、これまで国際会議のFOSS4Gで取り上げられてきたトピックとFOSS4G Hiroshima 2026のテーマについて紹介されました。一般発表(技術・開発中心)だけでなく、アカデミックセッション(学術研究発表)の動向も報告されました。質疑応答では、特にFOSS4Gに関する情報の入手に関するナレッジや、国際カンファレンスを見据えた世界的なコミュニティとの関わりなどについて議論されました。

参加者は約50名であり、FOSS4Gへの関心の高さが窺えます。引き続き日本での国際会議開催への機運をさらに高めていきたいと思います。当日の報告資料や動画などは以下の分科会サイトで公開しています。

<https://x.gd/g6UxM>

企画セッション (A-2)

(シンポジウム) 2025年度GIS教育実践アワード表彰式および表彰事例報告会

オーガナイザー：塚本 章宏

2025年度「GIS教育実践アワード表彰式および表彰事例報告会」は、地理情報システム学会教育委員会が主催し、初等中等教育の現場におけるGISを活用した授業の優良事例を顕

彰するもので、今年度は4つの実践が表彰されました。

まず、国土交通大臣賞(総合的な観点)は、小倉拓郎氏(兵庫教育大学学校教育研究科)ほか16名の「地形×創作 研究プロジェクト」による「地形×創作×GIS:GISと創作表現活動を往還・融合した地理学習の実践」が受賞しました。WebGISのデジタル情報と、紙粘土や3Dプリンタによるアナログな立体模型とを往還させる独創的な着想が高く評価されました。

次に、地理情報システム学会賞(GISの効果的な活用の観点)は、畔田豊年氏(兵庫県立龍野高等学校)の「GISとオープンデータを活用した探究活動(2020～2024年)」が受賞されました。生徒の空間的思考力や当事者意識を育む長年の継続的な取り組みで、GISを地域課題解決のための実践的手法として昇華させている点が評価されました。

続いて、日本地図センター賞(地図の効果的な利用の観点)は、鈴木泰幸氏(私立洗足学園中学高等学校)の「地理総合における地域課題分析のためのWebGIS活用について」が受賞されました。複数の無料WebGISを授業の目的に応じて巧みに使い分け、特に「open-hinata」の共有ドロー機能に着目し、生徒たちが地図上で協働的に思考を深める先進的な授業デザインが評価されました。

最後のESRIジャパン賞(GISの教育的な活用の観点)は、木場篤氏(ノートルダム清心中・高等学校)の「WebGIS×地域づくり」が受賞されました。GIS教育を「地理総合」から「地理探究」へと連動させ、生徒の地理的スキルを段階的かつ体系的に育成する優れたカリキュラムデザインが高く評価されました。

表彰式後の報告会では活発な議論が行われました。今回表彰された取り組みは、いずれもGISを単なる地図作成のツールとして扱うのではなく、生徒の主体的な学びや探究を深化させるための「思考の道具」として昇華させている点が共通しており、GIGAスクール構想を背景にGISの活用が教育現場に深く根付き、「地理総合」を強く意識した実践が増加している傾向が見て取れました。



授賞式の写真

企画セッション (B-1) (B-2) (シンポジウム) GeoAIの最前線

オーガナイザー： 巖 網林

11月1日午前、B会場にて企画セッション「GeoAIの最前線」を開催し、52名の参加者を迎えました。本セッションは、『GIS—理論と応用』主題特集「GeoAI—AI時代のGISフロンティア」の刊行に合わせ、GeoAI分科会の取組を報告する趣旨で企画したものです。セッションは話題提供（前半）、ハンズオン（後半）としました。

話題提供では、まず巖網林より国内外におけるGeoAIの最新動向について報告しました。続いて、片山耕治氏からはGeoAIにおけるGISとBIMの融合について、金森貴洋氏からは空間情報リサイクルにおけるAI技術体系について、金京淑氏からはGeoAI標準化の取り組みについて、大場章弘氏からはGeoAIプロンプトエンジニアリングについて、それぞれ話題提供をいただきました。

ハンズオンでは、本分科会が独自に開発してきたGeoAIツール「Mapbotica」を実演し、大規模言語モデル(LLM)を活用したGeoAIの可能性を参加者に実際に体験していただきました。題材としては、分科会の実験プロジェクトの一つである品川区大井町エリアのウォーカビリティを取り上げました。まちづくりワークショップで収集した街路のウォーカビリティデータを用い、Mapboticaのプロンプトに対して、空間バッファ機能を含む多様な質問を投げかけ、属性検索と空間検索を組み合わせた結果を導き出す演習を行いました。

演習ではまず、司会が用意した質問をもとに練習しましたが、次第に参加者もプロンプト対話に慣れ、各自で質問をカスタマイズしながら、得られる結果を楽しんでいました。従来であればGISの熟練者が数十の手順を踏んでようやく実行できる処理が一瞬で完了し、コーディングも一切不要である点に驚きの声が上がりました。90分の演習は余裕をもって完遂し、GeoAIの可能性を強く実感できる時間となりました。

最後に、前半の話題提供も踏まえて全員で振り返りを行い、GeoAIの理論、技術、実務に関する多面的な議論を深めました。長丁場のセッションではありましたが、内容は非常に充実しており、参加者の皆様から高い評価をいただきました。

セッション C-1 空間解析理論

司会：西 颯人

本セッションでは、空間解析理論に関する4件の発表がありました。

1件目の発表では、モラン固有ベクトルを用いた既往研究に対して、ラプラシアン行列を用いた空間回帰手法が提案されました。実証への応用も進められており、既存手法との比較も含め更なる発展が期待されます。2件目は、人口移動モデルと空間回帰モデルを組み合わせた分析の発表で、分析の改善・発展方法に関して活発な質疑が行われました。3件目はジオコーディングに対するLMM(大規模言語モデル)の応用可能性について検討したものでした。従来型のジオコーディングを改善できる可能性がある一方で、LMMがどのようにジオコーディングを学習しているのかという点も質疑では議論となりました。4件目はレーザスキャナを用いた集中治療室におけるスタッフの動線検知・分析に関するもので、質

疑では他のセンサリング手法との比較を含め、活発な意見交換が行われました。

「空間解析理論」というセッション名でありながらも、全体的に理論から応用までを意識した幅広いトピックの研究発表が行われた印象です。また、早朝にもかかわらず活発な議論が行われましたので、今後のさらなる研究発展が期待できるセッションとなりました。

セッション C-2 土地利用分析

司会：堤田 成政

土地利用分析セッションでは計4件の発表がありました。1件目の発表「建物外観画像と深層学習を用いた建物単位の空き家判定手法の開発」(発表者：奥村 太郎)は、360度カメラ画像を用いて深層学習モデルから空き家を推定したもの、2件目の発表「衛星画像と機械学習を用いた土地利用分類に基づく開発適地の自動選定手法の構築」(発表者：久保田 涼太)は、独自推定した土地利用分類図をもとに、土地開発ポテンシャルを宮城県、秋田県で推定したもの、3件目の発表「土地利用の変遷に着目した局所人口分布の空間変動の分析」(発表者：白石彩乃)は、空間的自己相関からAmbiguity of Spatial scale in densely Populated area (ASP)を算出し、都市のスポンジ化を大阪府において定量評価したもの、4件目の発表「マルチスペクトル衛星データと地域特性の統合による建物構造・築年次推定」(発表者：荻野 光司)は、超解像度化したマルチスペクトル衛星画像から建物構造・築年次推定モデル開発、に関する研究発表でありました。4件の発表はいずれも、聴衆からの関心も高く、質疑も活発に行われ盛況に行われました。

セッション D-1 地域分析 1

司会：馬場 弘樹

本セッションでは地域分析に関する4件の発表がありました。1件目の発表では、飲食店の多様性が滞在人口に与える影響を分析するため、シンプソンの多様性指数を用いた分析がなされていました。データ収集ではウェブスクレイピングを用いており、様々な技術を用いて研究に取り組まれておりました。2件目の発表は、位置情報に基づく滞在集積の時空間分布について、世代に焦点を当てて分析されていました。ローカルモラン統計量による分析の結果、世代間の滞在パターンの差異を見出しており、既往研究では明らかになっていない世代間の空間分布の違いを可視化できていました。3件目の発表は、都市ヒートアイランドの経年変化評価のため、名古屋市においてLandsat LSTの解析がなされていました。具体的な駅周辺での分析がなされており、将来の政策展開につながりうるものでした。4件目の発表では、立地アメニティとオフィス賃料の関係に着目して、ヘドニックアプローチによる分析がなされていました。モデルでは、交通利便性について細かく説明変数を分けており、オフィス家賃の価格形成要因を描けそうな結果が得られていました。各発表後には活発な質疑応答が繰り広げられ、多様な視点からの意見交換が行えたといえます。総じて、地理情報科学に関連する分析手法やモデルをフルに活かしながら発展的な分析を行おうという心意気を感じられ、大変有意義なセッションとなりました。

セッション D-2 地域分析 2

司会：土屋 泰樹

本セッションでは、「地域分析」をテーマとして、住宅や人口動態に着目した5件の研究が発表されました。いずれの研究も、近年のデータ利活用の高度化を踏まえ、地域の状況をより的確に把握するための新しい分析手法や視点を提示しており、大変示唆に富む内容でした。1件目の大嶋らの発表では、空き家の分布状況がメッシュサイズの変更によってどのように変化するかを、実際のデータを用いて分析していました。メッシュ解像度の違いが空き家の集積度の見え方に大きく影響する点が明確に示され、空間分析を行う際の基礎的な前提条件の重要性が再確認されました。2件目の斎藤らの発表では、光学衛星から取得したデータを用いて、市街地における建物の変化を自動的に検出するシステムが提案されました。リモートセンシング技術の地域モニタリングへの応用可能性が示されていました。3件目の佐藤らの研究では、地籍調査の進捗に影響を与える要因として、担当部署の違いに着目した点が特徴的でした。従来あまり議論されてこなかった視点から地籍調査の課題を捉えようとする試みとして興味深い内容でした。4件目の瀧澤の研究では、メッシュ単位で算出された多様な特徴量を用いて、社会増減に関連する因子を機械学習によって抽出した結果が報告されました。5件目の中山の発表では、住宅地図データをもとに住宅の細分化の実態を把握した分析結果が示されました。2件目の研究とも関心が近く、今後のコラボレーションや比較分析へと発展する可能性があると感じられました。全体として質疑応答も非常に活発であり、データの精度や分析手法の妥当性など、多角的な議論が交わされました。地域分析におけるデータ活用の広がりや今後の発展可能性を強く感じさせる、たいへん盛り上がりのあるセッションとなりました。

セッション E-1 景観

司会：吉田 崇紘

本セッションでは、街路景観と歩行空間・行動に関わる発表が4件ありました。

原田・沖論文では、街路動画画像の調査・取得の方法と視覚言語モデルを活用した印象評価の分析結果が報告され、緑の質と量、および街路整備の有無の印象評価への影響が考察されました。今後、地域性の反映や取得データの空間データの工夫などの技術的な提案が期待されます。

岩井・田中論文では、街路樹の間隔をパラメータとして街路景観を生成し、ヘッドマウントディスプレイを用いた印象評価実験を行うことで歩行者の視線行動に着目した景観の分析が報告されました。今後、街路樹以外の要素のコントロールとともに、没入体験と実体験による印象評価の差異の把握などの検討が期待されます。

戸田・田中論文では、マイクロスケールにおける歩行行動と道路勾配の関係を分析した結果が報告されました。今後、歩行者が独立に行動する場合と、集団的に行動する場合による歩行行動に対する影響や、歩行目的の把握など観察対象の属性との関連分析が期待されます。

野坂・田中論文では、鉄道駅の色彩イメージの要因分析の

結果が報告されました。駅前にある広場の色やシンボルとなっている建物の色彩だけでなく、必ずしも駅周辺の空間の色彩とは関連しない駅名に紐づいた色彩イメージが抽出されるなどの知見が得られていました。今後、調査対象者の抽出や回答された色彩イメージの理由の把握などさらなる分析が期待されます。

セッション E-2 移動・交通 1

司会：中山 俊

本セッションでは、移動・交通に関する4件の研究発表がなされ、時空間データを用いた研究の現在地と今後の展望を見通すうえで非常に示唆に富む内容でした。

各発表を俯瞰すると、移動情報と結びつける情報の性質によって二つの方法論が見えてきます。松江市の人流研究やシェアサイクルに関する研究では、土地利用、駅への近接性、曜日などといった比較的静的な空間・時間特性との関連づけが行われています。一方、動物の移動行動に関する研究では個体間の接触・遭遇、鉄道駅構内の乗客流動に関する研究では昇降施設における歩行者密度など、動的に変化する変数が分析に組み込まれていました。今後、こうした手法がより融合していくことで、これまで見ていなかった移動や交通の特性が明らかになるのではないかと感じます。

データに関しても興味深い論点がありました。本セッションでは、スマートフォンGPSデータのみならず、駅構内の実測データ、レンタル自転車の利用ログ、動物装着型センサーなど多様なデータソースが活用されており、取得手段の広がりとともに、それらをいかに加工・統合するかという課題が浮き彫りになりました。松江市の研究では、粒度の異なるセンサデータ、全国人流データ、流動人口データを換算係数によって統合しており、単一のデータソースでは捉えられない現象の把握を可能にしています。また、乗客流動の研究では、ミクロな経路選択の精度向上を図りつつも過度な精緻化を避ける姿勢がみられ、モデルの汎用性への配慮がうかがえました。

多様なデータと分析手法が交差する本セッションは、近年トレンドとも言える移動・交通に関する研究の更なる発展の可能性を実感させるものでした。

企画セッション (F-1)

(ハンズオン+シンポジウム) 第3回 GISA × MLIT's PLATEAU 研究会

司会：溝淵 真弓

本セッションは、地理情報システム学会と国土交通省都市局国際・デジタル政策課が2024年6月に立ち上げたPLATEAUについての研究や技術、情報交流を行う連携組織「GISA × MLIT's PLATEAU」の第3回研究会として開催しました。PLATEAUは2020年にスタートしてから多くの産学官の関係者が携わり、250都市以上の3D都市モデル整備、様々なユースケース開発が行われている一方で、研究や業務において普段使われるまでにはまだ十分普及していない課題があります。そこで今回は、「PLATEAUの名前は聞いたことはあるけど、使ったことはない」という方々を主な対象とし、PLATEAUの最新情報共有とあわせて、PLATEAU View、QGISを使ったハンズオ

ンを実施しました。

PLATEAU の最新情報共有は、国土交通省都市局国際・デジタル政策課より関根健太係長におこしいただき、3D 都市モデルの整備方法や整備都市の広がり、ユースケースの実例などプロジェクト全体について情報提供頂きました。ハンズオンは、「①PLATEAU View を使いこなそう」、「②QGIS で PLATEAU データを使おう」と題し、アジア航測の小馬谷一心氏、西原雅志氏が講師を務めました。最後に地理情報システム学会山本佳世子会長に、研究会の立上げ経緯のお話や本セッションのまとめなど総括をして頂きました。参加者からは、「PLATEAU View にこれほどの機能があるとは思わなかった」、「ハンズオン形式で分かりやすかった」といった声を頂き、今後も研究会を通じて、PLATEAU の普及と活用を促進し産学官の連携を深めていくことができればと思いました。

企画セッション (A-3)

(シンポジウム) 学生フリーテーマ発表会

座長：関口 達也

若手分科会では今年も企画セッション「学生フリーテーマ発表会」を開催しました。学生フリーテーマ発表会は、現役学生のみなさんが気軽に学会発表したくなる機運を醸成することで学会活動の入り口としてもらったり、今後の研究活動のモチベーションにつなげてもらったりすること、また、異分野の研究発表に触れる機会を提供することを主な目的として、2018 年大会から企画しています。

今回は、通常セッションと同様に研究成果の発表を主目的とする「成果発表の部」を実施しました。発表件数は 6 件でした。発表者を含めて約 40 名の方々にご参加いただきました。各発表のテーマは、(1) デジタル道路地図を活用した建物単位の居住満足度指標の開発、(2) モバイルビッグデータと既存の経済統計を活用した店舗単位の消費額推定手法の開発、(3) 災害後の農業復興における社会関係・経済・人的資本の効果検証、(4) 平均寿命と健康寿命の地域的・社会的要因分析、(5) 携帯電話位置情報データを用いた多層都市における歩行者移動経路の推定、(6) 携帯電話位置情報ポイント型データを用いた大規模商業施設来訪者の回遊行動推定、でした。ここ数年の傾向として、学生でも空間・時間的に高解像度なビッグデータを用いた研究に取り組んでいる例が多く、今年度は特にそれらを利用したデータ構築や手法提案といったテーマが多かった印象です。発表の後には、優秀発表賞と奨励賞の受賞者を決める聴講者投票も実施され、閉会式において若手分科会より表彰を行いました。本セッションは非学会員の発表も認めており、今年度も非学会員の方が発表してくれました。このセッションが今後も学生の皆様の学会活動への参加のきっかけとなることを期待します。

企画セッション (A-4)

(シンポジウム) 地方部の子どもの Active School Travel をいかに支援するか？：地理情報科学と GIS の可能性

座長：雨宮 護

本シンポジウムでは、子どもの運動不足や肥満、移動自由性の確保の観点からも重要な課題である、子どもの Active School Travel (徒歩や自転車による登下校) を、特に地方部

においてどのように促進するかをテーマとした話題提供とディスカッションが行われました。登壇者と発表の表題は以下の通りです。

- ・大西宏治 (富山大学) 富山市の児童の徒歩通学の特徴
- ・安部孝文 (島根大学) 島根県雲南市立掛合小学校におけるスクールバスのリモートドロップオフを巡って
- ・橋本成仁・廣瀬暖 (岡山大学) 小学生の通学手段についての分析
- ・高柳百合子・先田悠希 (富山大学) 富山の子どもと AST を取り巻く現状について

総合討論では、雨宮護 (筑波大学) をモデレータとし、会場を交えながらの議論が行われました。会場からは、共働き家庭が主流化する中で、下校だけでなく登校時にもそれを考慮するべきであることや、小学生を特定の場所までバスで移動させ、学校まで徒歩で通学する「リモートドロップオフ」の取り組みにおいて、地域特性を考慮しながらどのように乗車・降車地点を設定するべきかといった点が質問として寄せられました。シンポジウム会場には、これからリモートドロップオフに取り組まれようとしている富山県朝日町の小学校の PTA 会長様にもお越しいただき、当事者を交えた実りある議論が行われました。最後には、本シンポジウムの母体となる科研費研究 (23H00201) の代表者である樋野公宏 (東京大学) による総括がなされ、今後の実践に向けた課題が共有されました。

企画セッション (B-3)

(シンポジウム) 第 3 回 SIG-GIS シンポジウム ― 我々は国際標準の動向に Catch Up できているか

座長：太田 守重

このシンポジウムでは「我々は国際標準の動向に Catch Up できているか」というタイトルを掲げ、まず、日本測量調査技術協会による資格認定 (岡田泰征氏) 及び AIGID による PLATEAU アカデミー (大伴真吾氏) の現状と今後について発表がありました。次に、ISO/TC211 規格群の現状把握について (太田守重)、さらに、ISO/TC 211 地理情報標準化に携わるプレイヤーとその周辺について (笹川啓氏) の報告がありました。

その後、簡単なパネルディスカッションを行いました。ここでは次のような意見がだされました。(1) 規格化に貢献するためのハードルは下がっているが、個々の規格に対する専門知識及び、UML や XML Schema などのスキーマ言語に対する理解が求められる。(2) 規格に準拠する、国ごとのプロファイル (JPGIS など) や応用分野ごとの仕様 (PLATEAU など) の設計法への理解が求められる。(3) 仕様に従う地理空間データや応用システムの実装への対応能力が求められる。

これらの要求に応えるためには、資格制度や教育機会のさらなる充実が求められると同時に、現行規格の現状と今後を見据えて、制度や教育を進化させることが求められます。

最後に SIG-GIS 代表の村上広史先生 (青山学院大学) から、規格づくりは相撲に例えるなら土俵作りであり、地味な作業かもしれないが、土俵があるので力士は戦うことができる、というお話がありました。このシンポジウムの内容は次の HP で見ることができます。

<https://sites.google.com/view/gisa-siggis/event>

企画セッション (B-4)

(ハンズオン) 調査や研究をより効果的に！ ArcGIS Online セッション

座長：酒井 聡一

本セッションではクラウド GIS サービス「ArcGIS Online」を利用し、ArcGIS Online で利用可能な各種アプリを用いて、現地調査のための調査票の作成、Web マップによる GIS データの可視化、状況把握のための地図とグラフを組み合わせたダッシュボードの作成を体験いただきました。ArcGIS Online というソリューションを用いることで、現地でのデータ収集から状況把握までの一連のフローを効率的に実施できることを体感いただけたのではないかと思います。

調査票の作成・データ収集は、調査項目のパーツを組み合わせて簡単に調査票を作成できる現地調査アプリ「ArcGIS Survey123」を使用し、地域情報の現地調査を想定した調査票を作成しました。またダッシュボードの作成演習では「ArcGIS Dashboards」を使用し、マップとグラフ等を連動させて一画面で確認できるダッシュボードを作成することで、Web マップに可視化したデータの状況を対話的に把握できることを体験しました。

現地調査で位置情報と現地の情報を収集し、収集した情報をマップで可視化、さらにマップとグラフを組み合わせたダッシュボード アプリで状況を把握するという、データ収集から状況把握までの一連のフローを効率的に実施できることを体験したハンズオンを通して、今後の調査や研究、授業等に役立てていただければ幸いです。

セッション C-3 教育

司会：桐村 喬

「教育」セッションでは、いずれも学生による、4 件の発表が行われました。最初の「事前学習と継続的実践を融合した防災まちあるき支援システムの構築」(葛城太貴氏ほか)は、1 つのシステムで防災学習が完結するような仕組みの構築を目指すものでした。次の「RFID を用いた複数レイヤ同時取得のための触れる GIS 基盤に関する研究」(中村暢佑氏ほか)は、タンジブルな GIS (触れる GIS) の実現のために、RFID を使って複数のレイヤーの情報を同時に取得するための仕組みを開発しようとするものでした。続く「Three.js と AR マーカーを用いた物理模型操作の即時反映を可能にする Web ベース触れる GIS プラットフォームの開発」(石黒希海氏ほか)も、直前の発表と同じく、触れる GIS の構築に関わる研究となっており、模型を動かすことによって、3D 表示を変化させるためのシステム構築に Three.js を使うことを試みたものでした。最後の「視覚によるメッシュ建蔽率推定の学習一異なる地図表現の影響について」(吉田光杏氏ほか)は、都市計画の実務者が建蔽率を端的に推定することができるような方法の開発のために、異なる地図表現の影響を検討したものでした。今回の本セッションでは、地域住民を対象とした防災学習や、都市計画の実務者を対象とした専門的な研修など、広い意味での教育に関するテーマの発表が行われ、フロアからの関心も高く、質疑も活発でした。

セッション C-4 歴史・考古

司会：薄井 宏行

本セッションでは、①古城の 3D モデルを自動生成するシステム、②朝鮮半島の外邦図に機械学習 (セマンティック・セグメンテーション) を適用し水田や低湿地等を自動抽出する方法とその応用、③牧 (まき) に接する山間の村落における集落の景観及び空間認識の特徴の解明、④市民と大学の連携による博物館所蔵の写真コレクションの GIS 等を用いたデジタルアーカイブ活動の報告、⑤「公余探勝図」に描かれた二つの眺望の視点場を最新の地形データと CG 技術を用いて再検討した結果について発表がなされました。

質疑応答では、自動生成と復元の違い及びその精度 (①のご発表)、都市防災 (とくに土砂災害) の観点から切土と盛土の検出への応用可能性 (②のご発表)、用語 (野間土手と土手垣) の関係や当初の仮説との比較と意外性 (③のご発表)、市民から提供された写真の公開方法と情報の精査方法 (④のご発表)、これまでの一連の研究による手法の蓄積と効率化 (進歩) の有無などについて、活発な議論がなされました。

歴史・考古という共通の研究対象ではあっても、研究対象・地域やその時空間スケールは実に様々です。朝鮮半島 (②のご発表) のように戦前の国土スケールから、江戸時代の山間部や沿岸部の村落 (③、⑤のご発表)、そして建物スケール (④のご発表) まで広範にわたります。研究目的に応じて、様々な手法を適切に組合せることで、様々な研究対象×GIS (地理情報システム) による無限の発展可能性を改めて感じました。

セッション D-3 データ取得・アルゴリズム

司会：西尾 尚子

本セッションでは、地理空間情報の取得・処理・解析に関する多様なアプローチが紹介され、4 編の発表がありました。鈴木氏の発表 (D3-01) では、国際誌に掲載された地図における九段線描写を抽出し、著者の属性別に描画の有無をロジスティック回帰で分析することで、科学の政治化を問う報告がなされました。質疑では、地図描画や地名表記など国際的な議論を生む対象について議論する機関の必要性や、掲載誌の性格による傾向差に関する質問が寄せられました。南氏の発表 (D3-02) では、LiDAR 点群データをボクセル化し、時系列データの集合演算で静的物体を抽出し、クラスタ解析と静的物体接触フィルタリングにより動的物体を除去するリアルタイムアルゴリズムの提案が報告されました。質疑では、高速回転体などの認識精度やセマンティックな手法との比較に関する質問が寄せられました。Leng 氏らの発表 (D3-03) では、360 度画像を 10m 間隔で収集し、3D 点群を生成しセグメンテーションと組み合わせることで、セグメント情報を持つ 3D 都市空間を構築する低コスト手法の提案が報告されました。質疑では、3D モデル再構築時の欠落等の改善方針や新規性・独自性に関する質問が寄せられました。小松氏らの発表 (D3-04) では、自転車で撮影した全方位動画の軌跡を道路ネットワーク上に補正し、GIS データとマッチングさせることで、位置情報付きの細街路の建物外観画像を効率的に取得する手法の提案が報告されました。質疑では、撮影位置のマッチングの精度、ストリートビュー画像に付与する座標位置、自転車速度の影響に関する質問などが寄せられました。

報告や質疑を通じて、今後の研究の発展や議論の広がり期待される内容でした。

セッション D-4 防災 1

司会：岸本 まき

本セッションでは、防災に関する5件の研究発表が行われ、活発な議論が展開されました。

高橋氏による「超小型衛星による機動的極端気象災害監視の戦略」では、50kg級超小型衛星の性能や有用性が報告されました。地理情報システム分野におけるデータ活用の可能性について意見交換が行われました。

杉本氏らによる「停電履歴情報を用いた令和6年能登半島地震による停電GISデータの作成」では、町丁字別の停電率推移が報告されました。今後、ネットワーク特性を考慮した停電復旧分析への展開が期待されます。

松本氏らによる「津波に対する住民の主観的な防災意識と物理的なリスクのギャップ可視化に関する研究」では、津波リスクが高いにもかかわらず防災意識が低い地域の分布が報告され、防災意識の定量化手法について意見交換が行われました。

釜谷氏らによる「マニラ首都圏における洪水リスクが不動産賃料に与える影響の分析 ―賃料帯の異質性に着目して―」では、所得階層によって洪水リスクへの認識が異なる可能性を考慮し、洪水リスク指標のコンドミニアムの賃料への影響が報告されました。

阪田氏らの「観測衛星による大地震時の市街地被害解析ガイドライン案の検討」では、計4回の検討委員会で行われた議論内容を踏まえたガイドライン案が報告されました。より迅速な市街地被害状況の把握に向けた活用が期待されます。

セッション E-3 移動・交通 2

司会：大山 智也

本セッションでは、人の移動に関するデータをめぐり、様々なアプローチで我々の営みや社会のありようを描き出し、理解せんとする4件の研究報告が行われました。

1件目の大村・大佛・岸本・荻野の研究は、携帯電話位置情報ポイント型データに対して、滞留施設や滞在時間、さらにパーソントリップデータを用いた機械学習モデルから推定した滞留目的を付与するという難しい課題に挑戦するものでした。今後は是非、駅周辺やテーマパークといった一つの施設に限定されない、同一エリアでの活動も捉えられるような拡張も期待したいところです。

2件目の白勢・井上の研究は、擬似人流データ（東大CSIS）の移動時系列から個人属性と発地を入力、着地を出力とする順伝播型NNにより得られたベクトル表現から、地域間の関係を描き出そうとするユニークなものでした。近接性だけでは把握できない関係が捉えられるなど、データドリブンで動的な地域間関連性の分析手法の発展を予感させるものでした。

3件目の瀬貫・Pang・関本の研究は、LLMを活用して擬似人流データから移動態様を作成しようとする野心的なもので、生成エージェントによる移動系列の生成と、評価エージェントによる評価をループさせる手法で、多様な移動系列の生成を試みました。人流データを理解するためのAIという新たな

活用方法を開拓する端緒となる研究となりそうです。

4件目の吾妻・山本の研究は、パーソントリップデータから、小ゾーン単位での地域の通院行動負担を定量化しようという社会的意義の大きい分析でした。交通手段別に重みづけを変えろといった工夫により、現実的な計算結果が得られたようです。今後、総合病院の撤退した場合に、その前後でどの程度住民の通院負担が変化したかなど、様々な応用が期待されます。

本セッションも満員となり、フロアとの議論も活発に行われ、このテーマへの聴衆の関心の高さがうかがえるものとなりました。

セッション E-4 移動・交通 3

司会：関口 達也

本セッションでは、5編の発表が行われました。

金森氏からは、人流データを用いて駅からの距離を考慮した歩道構造や沿道施設が人々の滞在量に及ぼす影響を分析した成果が発表されました。中山氏からは、人流データを用いて滞在・そして会友行動を抽出する試みについて発表がなされました。Boratsinskii氏からは、パーソントリップ調査のデータを活用して、人々の地域内のミクロな移動を加味して都市活動の拠点抽出する試みの成果が発表されました。鄭氏からは、GPSデータを用いて鉄道通勤の経路選択の統計的モデル化とその実証分析の成果の発表がなされました。清水氏からは鉄道のインフラ管理に関する現場のニーズを組み込み開発されたモバイルGISアプリケーションの開発の成果が発表されました。各発表の質疑では、研究や分析の条件設定や結果の活用方法に関する質問などが多く挙がり、発表者と活発な議論がなされました。

本セッションの5編の研究報告は、近年急速に利活用が進む人流データのような、人々の時間・空間的にミクロな移動の履歴や状況を表すデータやそれをモデル化するための手法提案が多く用いられていました。一方で、実際の現場からの問題意識による研究発表もなされたことで、実務・理論の両側面からの、社会課題に対するアプローチの重要性を実感するセッションでした。

企画セッション (F-3) (F-4)

(ワークショップ) GISカードで考える新たな地域課題解決のアイデア ～「最初の一步」から「ローカライズ版アイデア創出」まで～ (教育委員会・自治体分科会共同企画)

オーガナイザー：塚本 章宏

教育現場における情報機器整備の遅れや教員のスキル不足、また自治体における職員研修の時間確保の困難さなど、人材育成の課題がGISを導入する際の大きな壁となっていました。この「GIS導入の最初の一步」という共通のハードルを越えるため、GISの概念や空間的思考を手軽に体験できるカードゲーム型教材「GISカード」のワークショップを開催しました。本ワークショップは、GISカードの楽しさと有用性を実感し、教育と行政の両分野への普及につなげることが目的です。当日はGIS研究者、大学・高等学校教員、自治体職員、学生、GIS関連企業など、分野を横断した幅広い層から参加がありました(26名)。

セッション前半では、まずカードの基本編・応用編を体験しました。地図情報が描かれたレイヤーカードを組み合わせ、地域課題の解決策となる主題図を作成する GIS の基礎的な思考プロセスを学びました。続いて、教育と行政それぞれの視点から現状の課題が報告されました。石川県で高校生に GIS カードを実践した佐藤将氏（金沢星稜大学）からは教育現場の具体的な反応、家中賢作氏（つくば市）からは自治体が保有するオープンデータ活用の現状、さらに青木和人氏（福井県立大学）からは自治体研修や住民参加型ワークショップでの活用可能性が示されました。

セッション後半は、「ローカライズ版のアイデア創出」をテーマに、「自治体」「教育」「北陸地域」など関心のあるグループに分かれて、各地域や分野特有の課題を解決するオリジナルの GIS カードを考案しました。課題を文章化し、解決に必要なレイヤーカードの組み合わせ（主題図）を作成して発表する過程を通じ、参加者は GIS を用いた課題解決の思考をより実践的に体得していきました。

実施後のアンケートでは好意的な感想や建設的なコメントが多数寄せられ、GIS カードの今後の普及・活用に向けた貴重な成果が得られました。

企画セッション（A-5）（A-6）

（シンポジウム）新しい空間データが切り拓く空間情報科学の未来

オーガナイザー：山田 育穂・吉田 崇紘

今回のセッションでは、「新しい空間データ」をテーマに掲げ、空間情報科学の最前線における多彩な取り組みをご紹介します。どの分野でもそのフロンティアには、未知の課題に経験と知恵をもって挑む人々がいます。本企画は、そうした現場での試行錯誤や、通常の学会発表や論文では語られにくい工夫・苦勞、そして将来の展望を、オムニバスの共有という趣旨で準備しました。これは空間情報科学のコミュニティへの貢献であると同時に、参加者にとっても発見と楽しさを伴う場になると考えたからです。

当日は、空間情報科学のフロンティアで活躍する 10 組の登壇者からの話題提供があり、多様な取り組みが共有されて、会場では活発な議論が交わされました。ご参加いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。以下に各発表の概要をご紹介します。

(1) 東京大学空間情報科学研究センターの共同研究利用システム JoRAS に蓄積された 1998 年から 2024 年までの共同研究内容のテキスト分析、(2) UAV によるデータ取得の最新事例と利活用に向けた倫理上の課題、(3) 富山県における自治体での衛星データ活用事例、(4) 行政データの空間データ化と社会実装での活用、(5) 空間情報を紐付けた社会調査データ「地理参照サーベイデータ」の構築、(6) 地下空間を含めた 3 次元デジタルツインの展望、(7) 調査票情報と紐づいた属性情報豊富な携帯端末位置情報の紹介、(8) マルチソースデータを統合した合成人流データの構築、(9) 街路景観画像と空間データを紐付けた空間分析のまちづくりへの貢献可能性、(10) 生活行動履歴データによる都市エリアと生活移動特性のモデリング

新しい空間データの可能性と、その活用に向けた実践的な知見が詰まったセッションとなりました。今後もこのような

交流の場から、新たな発見や連携が広がっていくことを期待しています。

企画セッション（B-5）

（シンポジウム）＜富山企画＞時間地理学の新潮流：富山市住民の日常生活行動分析

オーガナイザー：

西村雄一郎・大西宏治・瀬戸寿一・久木元美琴・岡本耕平

本セッションは、「時間地理学の新潮流：富山市住民の日常生活行動分析」と題して開催されました。1970 年代にスウェーデンの地理学者ヘーゲルストランドが提唱した時間地理学は、近年の位置情報ビッグデータの活用により国際的研究においてリバイバルを遂げています。本セッションでは、本大会の開催地である富山市を対象としたいいくつかの事例研究と 2024 年 8 月に当市で開催された第 5 回時間地理学国際会議の成果を報告し、日本における時間地理学の再興に向けた議論を行いました。

岡本耕平（愛知大学）は、時間地理学の日本における展開と時間地理学国際会議の経緯を紹介しました。1987 年に始まった時間地理学研究会の活動、日本と中国での実証研究の蓄積、そして 2018 年以降の国際会議ネットワークの構築について解説し、家庭内の役割分担の状況を踏まえた日常生活行動の実態把握における時間地理学的分析の意義を示しました。

大西宏治（富山大学）は、富山のまちづくりの歴史を紐解きながらコンパクトなまちづくりの狙いや現在の都市構造について概観した後、2021 年に共同研究として実施された生活活動日誌と移動履歴を活用した地域課題について報告しました。

瀬戸寿一（駒澤大学）は、Agoop 社の携帯電話位置情報を用いて、2021 年 9 月の COVID-19 禍における富山市内の生活行動を分析し、世代別・時間帯別の移動パターンや、平日・休日の滞在場所の空間的特徴を明らかにしました。

西村雄一郎（奈良女子大学）は、富山市民（140 件）を対象とした生活活動日誌調査の全体像と結果概要について、時間地理学の視点に基づく調査設計や基礎的な分析結果を報告しました。久木元美琴（京都大学）は、生活活動日誌調査を踏まえた子育て世帯へのインタビュー調査から、富山市郊外における居住地選択と親族サポートの関係を分析しました。郊外居住世帯の居住地決定の状況や、車と親族ネットワークに依存した富山型モデルの実情・課題を明らかにしました。

以上の事例報告を踏まえて、会場の参加者を交えて質疑応答や議論が活発に行われました。

セッション C-5 可視化 1

司会：片岡 勲人

本セッションでは、人の活動を可視化する研究 2 件と、施設の可視化に関する研究 2 件、合わせて 4 件が発表されました。

人の活動に関する研究としては、川路もね（東京科学大学）氏らによるビデオ映像を用いた幼児行動の推定、橋本蒼真（東京科学大学）氏らによるビーコンを活用した勤務医の活動可視化が報告されました。

施設に関する研究では、梅宮咲恵（関西大学大学院）氏ら

による LiDAR で取得した地下埋設管の情報管理、相（昭和女子大学）氏による建築環境の可視化に関する研究が報告されました。

これらの研究は、保育所、病院、地下埋設管、建築環境といった具体的な対象を設定し、位置情報に基づいて人の活動や空間利用の構造を独自の方法で分類・解析する提案です。その先には、社会活動の質を高めることを目指す姿勢がうかがえます。

質疑応答では、日常生活の正確な把握を目指す視点から活発な議論が展開されました。こうした議論は、発表者による整理された口頭発表に支えられており、その背景には本人の努力と指導教員の支援が重要な役割を果たしていると考えられます。具体的な意見交換を通じて、研究の意義や今後の課題がさらに明確になりました。

セッション C-6 居住

司会：夏目 宗幸

本セッションでは、居住に関する課題に関する 4 件の研究発表が行われました。1 件目は、賃貸集合住宅市場における家賃形成の地域差を解明する新たな統計的手法を提案しました。Generalized Group Lasso (GGL) モデルを採用することで、ベイズ推定の枠組みを拡張し、小地域がもつ固有のパラメータの不確実性を考慮しつつ、賃料形成のパターンを抽出することができる点が優れています。東京都杉並区を事例としたデータ分析では、駅距離や専有面積などの要因に対する評価が、鉄道沿線や公園周辺などの特定の地域で全体平均から乖離していることを明らかにし、今後、不動産市場分析における賃料形成要因の評価に活用できる可能性を示しました。2 件目は、コロナ禍が都市の買い物環境に与えた影響について、食料品店の営業時間を指標に分析しました。機械学習 (LightGBM と SHAP) を用いた要因分析の結果、コロナ前は人流などの「需要側」の要因が営業時間を規定していたのに対し、コロナ後は従業員数や店舗面積といった「供給側」の制約がより強く影響していることを解明しました。これは、人手不足などの供給側の事情がサービスの縮小を招き、新たな「買い物不便」を生じさせている可能性を示唆しています。3 件目は、プライバシー保護やコストの観点から入手が困難な建物属性データを、オープンデータのみで整備する手法を開発しました。建物の形状情報と国勢調査などの統計データを組み合わせ、機械学習 (XGBoost) を用いて建物を「戸建て」か「それ以外」に分類するモデルの構築を行っています。広島県のデータで学習させたモデルを埼玉県さいたま市に適用した結果、町丁字レベルでの戸建て住宅数の推定において極めて高い精度を達成し、汎用的な建物データベース構築への道筋をつけました。4 件目は、デジタル社会の基盤となる「住所」データの課題に焦点を当てました。土地の細分化に伴い、自治体が独自に導入している住居番号の「枝番（補助番号）」などの運用実態を調査した結果、付番ルールや住所の階層構造（枝番を住居番号の一部とするか、方書とするか等）が自治体間で不統一であることを指摘しました。これがアドレス・ベース・レジストリなどのデータ整備の障壁となっており、国による標準化の必要性を提言しました。

セッション D-5 防災 2

司会：杉本 賢二

本セッションでは防災に関する 4 件の発表がありました。1 件目の発表は、津波遭遇を考慮した避難経路探索に関する手法を開発した研究で、従来のアルゴリズムに比べ、安全性と移動効率のバランスの取れた避難経路探索が実現されていました。2 件目の発表は、航空写真に加えオープンデータを利用した土砂災害検出に関する研究で、入力データの入手可能性や計算負荷の観点から、個人でも分析が可能であるという利点が挙げられていました。3 件目の発表は、人流データから水害時における避難者数を算定した研究で、差分の差分値を用いて避難情報は連れに伴う避難者を推定した点に、研究のユニークさがありました。4 件目の発表は、地震時の道路閉塞が消防隊の到着時間に与える影響を評価した研究で、全壊建物が多い地域で遅延時間が長くなるといった地域特性や、遅延抑制の提案がなされました。他の「防災」のセッションと比べ、いずれも深層学習や人流データ、ネットワーク解析といった、空間的構造の関係を高精度で分析する手法が用いられていたことが特徴でした。発表では、結果の精度に改善の余地があるなど課題は述べられていましたが、今後の研究を発展させる余地が大いにあったと感じました。

セッション D-6 自然・環境

司会：瀬戸 寿一

本セッションは「自然・環境」と題して、主として都市部を対象とした環境モニタリングや自然環境の定量的評価に即した事例研究を中心に全 4 件の発表が行われました。西原雅志他 3 名（アジア航測株式会社）は、PLATEAU データ (LOD1 と LOD2) を基礎に国立天文台や気象庁などによる日射量・日照量から壁面発電ポテンシャル解析を行ったもので、金沢市と加賀市を対象に効果検証を実施した成果を報告しました。村上拓・堤田成政（埼玉大学）は、PLATEAU の建物データに含まれる建物用途・延床面積の属性と CO2 排出源単位データを組み合わせた CO2 排出量推定手法について、さいたま市を対象に報告しました。古川万莉菜・中山俊（専修大学）は、神奈川県川崎市多摩区における竹林分布の変化を推計したもので、Google Earth の航空写真を元に目視判読により 2018 年と 2023 年のデータを作成したうえで分析を試みました。早坂遼・堤盛人（筑波大学）は、羽田空港の新飛行経路による広域騒音の推計を、飛行経路データ・アットホーム社の不動産データ・標高データ・3D 都市モデルを組み合わせ、物件の空間的距離（高さ）を考慮して算出した結果を紹介しました。また、騒音の実測調査も行ったことで騒音推定値の妥当性に関する考察も行いました。

以上のように発表の多くは、3 次元都市モデル PLATEAU データや国土地理院の標高データなど、高さ情報を加味した GIS データを駆使することで、都市空間の環境分析をダイナミックに行うための手法を提案した点に大きな特徴がありました。これら 4 件の研究発表に対して、参加者から多くの質問や今後の研究に関するアドバイスが多数寄せられ、さらなる研究の進展が期待されました。

セッション E-5 移動・交通 4

司会：長谷川 大輔

本セッションでは歩行行動・観光行動・景観に関する4件の報告があり、活発な質疑・議論が行われました。

小林・伊藤による報告では、観光客の時空間的な行動様態を把握することを目的として、疑似人流データを活用した観光客の行動の類型化と、行動パターンと個人属性との対応を分析しています。疑似人流データの特性、世帯構成による違いに関する議論が行われました。

一宮・田中による報告では、動画より行動歩行者流動の計測を行い、多重リングバッファとカーネル密度を活用した、人の密度に着目した歩きやすさの評価と、単独・集団移動というケース別に分析しています。質疑応答では歩行者の動的情況の計測手法などに関して議論が行われました。

富樫・中谷による報告では、歩きやすい空間の整備が近隣小売店の売上増加に寄与するのかの把握を目的として、Google Street Viewによる景観画像と経済センサスの小売商業販売額のパネルデータを用いた因果推論を行っています。その結果、郊外部のロードサイド型の歩道拡幅が、売上増加に影響があることが示されました。質疑ではその結果について、店舗密度の違いが影響について議論が行われました。

野邊田・山本による報告では、スポーツツーリズムを支援するウェブシステムの研究開発を目的に、メッシュ型人流データを活用した混雑度の推計と、利用者の特性に基づいた観光スポットの推薦を行いました。試験運用では研究室のメンバーを対象にシステムの操作性やデザインの改善点についての意見を収集しています。質疑ではイベントの質の違いなどの影響について議論がなされました。

セッション E-6 安心・安全・犯罪分析

司会：相 尚寿

E6セッションでは、安心・安全・犯罪分析に関する4件の研究発表が行われました。E6-01は、静岡市を事例にした歩道橋の撤去と周辺の道路環境および居住者特性に着目した分析で、実際には現存するものの分析結果では撤去済みであると予測された歩道橋についての詳細が報告されました。質疑では、説明変数選定の妥当性、手法選択の理由、分析結果の解釈に関する議論が交わされました。E6-02は、兵庫県を事例にした救急搬送の所要時間に関する分析の報告でした。通報から救急隊が現場に到着するまでの時間と、通報から患者が病院に収容されるまでの時間を、消防本部単位で分析したものです。質疑では、地域の努力で変化させられない変数を所与としたときに搬送時間を短縮できた地域は見られたか、道路渋滞やドクターヘリによる搬送の影響を加味できているか、分析の動機である豪雪地帯での搬送遅れは見られたかなどが話題になりました。E6-03は、時間的にも空間的にも非常に粒度の細かい犯罪リスク推定手法の提案でした。時空間的な粒度を上げるほど、ほとんどの場合で犯罪発生件数がゼロとなり、予測が難しく、また計算量が膨大になるという課題の克服を目指したものです。質疑では、予測の評価方法について確認されたほか、空間的な粒度を上げたことにより予測したメッシュの隣で犯罪が起こってしまった場合の現場のフラストレーションについても共有されました。E6-04は、

茨城県を事例にして太陽光発電所を狙った金属盗犯罪の予測モデルが紹介されました。主要な犯罪予測手法のうちホットスポット分析と機械学習を組み合わせた方法が提案され、その予測結果に基づき実際にリスクが高い地域を重点的に巡視するパトロールを行ったことによる抑止効果も検証されました。質疑では、機械学習で用いたパラメータの中身が確認されたほか、発電所自身が防衛する取り組みを行っているか、パトロールの実施により犯罪発生空間の転移が起こっていないかなどが議論されました。

企画セッション (F-5)

(ハンズオン) Metashapeを使った国土地理院空中写真からのDSM・3Dモデル生成

座長：桐村 香

Metashapeをはじめとした比較的安価なソフトウェアの普及とともに、複数枚の写真から3次元的な情報を生成・抽出するフォトグラメトリへの社会的な関心が高まってきています。そこで、昨年、一昨年の大会に引き続き、国土地理院が地図・空中写真閲覧サービスで公開している400dpiの空中写真から、Metashapeを利用して3Dモデルや点群、DSM(数値表層モデル)を取得するための手順について紹介し、ハンズオンとして実際に作業していただく企画セッションを開催いたしました。

まず、冒頭で桐村による、いくつかの都市におけるこれまでの取り組みについて簡単に紹介しました。そして、その過程で経験的に確立してきたワークフローを示しつつ、旧大川寺遊園周辺(富山市)の1975年の空中写真7枚と写真の中心点やGCPなどの必要なデータを配布して、DSM・3Dモデルの生成までの手順を紹介しながら、参加者に作業していただきました。参加者数は、事前申し込みの人数を大きく超える17名(ご記名いただいた方)となり、フォトグラメトリやMetashape、3Dでの過去の景観復原への関心の高さを実感しました。今回も非会員の参加者が多く(17名中10名)、会員やGISに関心を持つ一般の方々に対する技術的なセミナーという意味でも、本セッションは一定のニーズを満たすことができたものと思われます。

企画セッション (F-6)

(シンポジウム) デジタルアース研究の現状と将来展望(2024)

座長：福井 弘道

本企画セッションは、「デジタルアース研究の現状と将来展望(2025)」と題して、2014年に文部科学大臣の認定を受けて活動を開始した中部大学「問題複合体を対象とするデジタルアース共同利用・共同研究拠点」の共同研究活動について、2025年度が認定最終年となるにあたり、これまでの12年間の共同研究内容の総括と、今後のデジタルアース研究の展開と方向性に関するパネル議論という2部構成で、対面とオンラインを併用したハイブリッドの形式で行いました。

前半では、拠点のこれまで12年間に採択・推進した共同研究について、その概要を、研究課題を担当した拠点世話人よりご紹介しました。共同研究課題は、全国の大学・研究機関の方が研究代表者として参画・推進するもので、そのテーマ

は、衛星データや統計データ、深層学習等の技術要素を統合し運用するものから、気候変動や防災、感染症といった具体的な問題複合体を扱い解題を目指すものまで多岐にわたりました。後半では、ゲストに北本朝展先生（国立情報学研究所）、関本義秀先生（東京大学）、増田耕一先生（立正大学）、山本佳世子先生（電気通信大学）をお迎えし、今後、これまで実施してきた拠点の研究活動を総括し、次のステップに繋げて展開するための方向性などが議論されました。

本セッションでは、現地参加 25 名、オンライン 5 名の合計 30 名の方にご参加をいただき、盛会のうちにシンポジウムを終えることができました。ご参加くださった皆さま、運営ご協力くださった皆さま、関係の皆さまに心より感謝申し上げます。

中部大学問題複合体を対象とするデジタルアース共同利用・共同研究拠点では、今年度をもって共同利用・共同研究拠点としての活動をひと区切りといたしますが、今後も中部大学国際 GIS センターとしてデジタルアース分野の研究をより一層活発に展開してまいります。これからも引き続きのご支援・ご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

セッション C-7 可視化 2

司会：武内 樹治

本セッションでは、「可視化」というテーマのもとで、デジタルアーカイブ、3次元建物モデル、人流データという幅広い内容の報告が行われました。

青木氏による「地理空間情報による福井空襲史デジタルアーカイブの構築」では、福井空襲に関する記録のデジタルアーカイブ化・WebGIS 公開による被害の可視化と空間的分析が報告されました。特にデジタルアーカイブ化が学生による自発的なプロジェクトとして実施されている点は注目されます。村瀬氏らによる「状態をもつ描画点による多様なファサードを有する 3 次元建物モデルの自動生成」では、状態遷移図に基づくアルゴリズムで、建物の外壁にリアルな凸凹や緑化バルコニーを自動生成する手法が提案されました。西氏らによる「鉄道駅を起点とした徒歩人流方向の自動分割」では、GPS 人流データをもとに駅からの徒歩移動方向を自動的に分割する新手法が提案されました。特に AIC による最適分割に基づき多重バッファリングを活用した駅圏域可視化が示されました。長谷川氏らによる「道路単位での歩行者量分布に基づく駅徒歩圏域の広がり分布の計測」では、実際の歩行者流動を道路単位で分析し、商業地や集客施設の配置が徒歩圏域の拡大に寄与することを明らかにしました。

質疑応答では、歴史的資料からの GIS データ化に関するナレッジや、3次元建物モデルのまちづくりや実務面での応用、今回の研究対象とは異なる特徴をもつ場所での圏域の検討の可能性、通行量の可視化・分析結果の都市計画への応用方法など、可視化セッションとして、幅広い地理空間情報の可視化方法やその解釈・可能性、応用について議論され、今後の地理情報科学の進展が期待できる有意義なセッションとなりました。

セッション D-7 防災 3

司会：上杉 昌也

本セッションでは、防災に関する 4 件の発表が行われました。

1 件目の橋本ほかによる発表では、VR 上の疑似津波避難行動と fMRI による脳神経活動を統合的に分析しようとするもので、避難の成功者と失敗者の脳活動差を GIS 上で可視化した研究が報告されました。本研究には空間情報科学や脳神経科学などの多様な研究者が参画しており、防災リテラシー教育の新たな方向性を示唆するものでした。

2 件目の塩崎ほかによる発表も 1 件目の発表と連動するものであり、VR 避難実験での避難の成否に関して、脳活動データを VR 空間の位置情報と結びつけて GIS 上で空間解析を行った結果、特に成功群では情動と記憶の統合が安定しており、空間的手掛かりの利用が適切な避難行動を促す可能性が示されました。

3 件目の小野塚による発表は、携帯電話人口統計の構造が動画フレームのピクセル変化と類似する点に着目し、携帯電話人口統計データの新たな解析手法を提示するものでした。事例として胆振東部地震では、明瞭な人口分布変化が検出された一方、能登半島地震では年末年始特有の人口変動が影響するなど、今後の手法改良の課題も整理されました。

4 件目の林ほかによる発表では、実践的な防災情報収集・共有システムの開発が紹介され、現場からの通行情報をリアルタイムで収集し、GIS を基盤としたデータ共有プラットフォーム上で自治体・関係機関間で共有する仕組みづくりが報告されました。質疑では、今年実際に運用された状況やその際の課題などについても議論されました。

いずれの発表も、防災行動や災害対応の高度化に資するユニークで新しい手法を提示するものであり、さらなる展開が期待されます。

セッション E-7 データベース構築

司会：村上 大輔

本セッションでは、データベース構築に関する 4 件の報告がありました。1 件目は、研究にも活用しやすい基盤道路ネットワークデータの整備と、その Web API を通じた公開に関する報告でした。私自身、既存の道路関連データの扱いにくさを感じた経験があり、自由でオープンな道路ネットワークデータを整備・公開する本取り組みは非常に有意義であると感じました。2 件目は、小地域での将来人口推計に関する報告でした。コーホート変化率法を基盤とし、世界各地の小地域人口データベースを精緻に推計・公開しており、災害対応などさまざまな分野で役立つ重要なデータベースであると感じました。3 件目は、BIM (Building Information Modeling) の地理情報科学における活用の現状と期待に関する報告でした。報告にもあったように、建物データの研究利用には制約が多く、BIM 活用を促進するこうした取り組みは、建物単位のミクロスケールでの GIS 研究を進めるうえで不可欠であると思います。最後に 4 件目は、地理情報における時点表現の精緻化に関する報告でした。和暦・西暦・数値など多様な時点表現を矛盾なく統一的に扱えるモデルを開発するものであり、時空間データの規格策定に向けた重要な取り組みだと感じました。以上のように、本セッションでは多様な視点からデータベース構築に取り組む研究が報告されました。特に、近年需要が高まるマイクロデータ（建物・道路など）に着目し

た研究が多かった点が印象的でした。

学会賞

選考報告

学会賞委員会委員長 井上 亮

本年度の学会賞は、昨年度と同じ6部門で公募を行いました。応募の中から学会賞委員会が6件を推薦し、理事会で承認され決定しました。授賞式は11月1日の地理情報システム学会第34回学術研究発表大会の懇親会内で執り行われ、受賞者には会長から賞状と副賞の盾が贈呈されました。

受賞者および受賞理由

■ 学術論文部門 増山 篤（弘前大学 人文社会科学部）

空間的な近接性・アクセシビリティに関する理論化およびツール化などに関する研究について、計25本の審査付き論文を出版されており、地理情報科学の発展に関する寄与は大きいと認められました。

■ 学術論文部門 河端 瑞貴（慶應義塾大学 経済学部）

GISを活用した社会経済現象の分析およびGIS教育に関する調査・研究に従事され、地理情報科学分野に関する計21本の審査付き論文を出版されており、地理情報科学の発展に関する寄与が大きいと認められました。

■ ソフトウェア・データ部門 人の流れプロジェクト（People Flow Project）

（代表）龐（Pang）岩博（Yanbo）

（東京大学 空間情報科学研究センター）

樫山 武浩（大阪経済大学 経済学部）

関本 義秀（東京大学 空間情報科学研究センター）

全国の人の移動を模擬した擬似人流データは、プライバシーに関わる問題を回避した分析を可能としています。学術的な分析だけでなく、実社会での問題解決にも応用されるなど、広い分野への活用が期待され、GISの更なる発展に寄与する成果と認められました。

■ ソフトウェア・データ部門 市区町村別・ハザードエリア内の居住人口等推計データ

（代表）中野 卓

（国立研究開発法人建築研究所 住宅・都市研究グループ）
竹谷 修一

（国立研究開発法人建築研究所 防火研究グループ）

自治体の災害対策検討に不可欠な基本的データであるにも関わらず、これまで存在していなかったハザードエリア内の居住人口を推計・公開する取り組みです。推計方法の解説は査読付き論文として公開され信頼性が高く、また豊富な利用実績があることが示されており、都市防災施策への貢献が大きい取り組みだと評価されました。

■ 著作部門 基礎から学ぶ GIS・地理空間情報

桐村 喬（京都産業大学 文化学部）

上杉 昌也（福岡工業大学 社会環境学部）

米島 万有子（熊本大学大学院 人文社会科学部）

相 尚寿（昭和女子大学 人間社会学部）

鈴木 重雄（駒澤大学 文学部）

2022年高校での地理の必修化の動向を受けて、高校での利用を全面的に意識したテキストです。GISの技術習得に必要な項目は網羅しつつ、コンパクトにまとめられており、授業における教科書としての利用だけではなく、初学者向けの独習書としても有用な1冊だと評価されました。

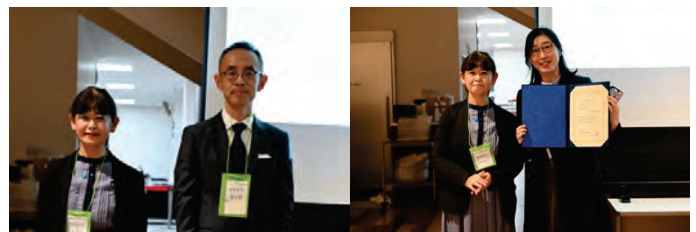
■ 実践部門 奈良文化財研究所文化財情報研究室

高田 祐一

武内 樹治

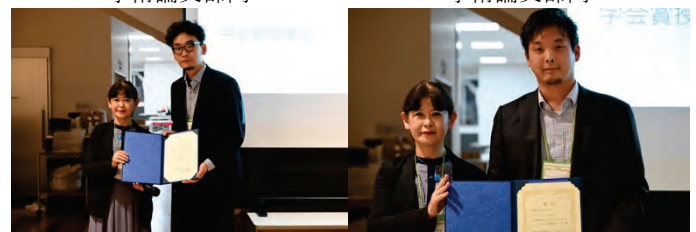
応募団体が運用する文化財総覧 WebGIS は、膨大な文化財情報を地図上でわかりやすく表現でき、様々な分析も可能な操作性がよいシステムとなっており、文化財保護へのGISの活用事例として先進的な取り組みと評価できます。また、蓄積された情報を活用した歴史研究や文化財保護に向けた研究、実務者向けのGIS教育、文化財デジタルデータの諸外国との共有を図るなど、活動は多岐にわたっており、いずれもGISや地理情報科学の発展や普及に大きく寄与するものと評価されました。

応募を頂きました皆様に深く感謝申し上げます。今後とも、学会賞への積極的な応募（自薦・他薦を問わず）をご検討いただければ幸いです。



学術論文部門

学術論文部門



ソフトウェア・データ部門

ソフトウェア・データ部門



著作部門

実践部門

学会賞受賞者

学術論文部門受賞

増山 篤

このたびは、学会賞「学術論文部門」という大変栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。受賞の知らせを頂いた際には驚きとともに、これまで取り組んできた研究が一定の評価をいただいたことに大きな励みを感じました。多く

の方々のご支援とご助言があつてこそ続けてこられた研究であり、ここに心より御礼申し上げます。

私の研究を俯瞰すると、時期ごとに扱っているテーマがやや異なるように見えるかもしれませんが、研究を重ねる中で徐々に輪郭が明瞭になってきたものではあります。当初から一貫して抱いてきた関心があります。それは、「空間データを用いて社会の現象をより正確に理解できるようにすること」、そして「地理情報科学における理論と実践をつなぐこと」です。

まず初期の研究では、行政界データに代表される領域分割図を対象に、異なる時点間でのズレを自動検出する方法を提案しました。この研究では、当時国内ではほとんど認知されていなかった“コンプレッション”という国際的研究領域に早期に着目し、その枠組みを導入する形で研究を展開することで、GIS による空間分析の基盤となるデータ品質の向上を目指しました。

その後は、都市・地域における活動機会へのアクセシビリティ研究に注力してきました。たとえば、個人が置かれる時空間制約を考慮しつつ、ミクロ経済学の理論とも整合的で、実際の選択・行動データを活用できる指標を提案するなど、空間アクセシビリティという常に関心の高い領域において、理論と応用の双方を志向しながら研究を進めてまいりました。

また近年では、R や Python といったオープンソースプログラミング言語を活用し、空間分析や地理情報処理を再現性高く効率的に実行できる仕組みづくりにも取り組んでおります。こうした研究を通じて、地理情報科学が学術のみならず社会の中でも価値を発揮しうる可能性を、わずかでも広げることができていれば幸いです。

現在は、空間データの公開におけるプライバシー保護とデータ利用可能性の両立を図る方法について研究を進めております。今回の受賞を励みに、今後も理論と実践を往復しながら、地理情報科学の発展と社会への貢献に努めていく所存です。この場を借りて、改めて皆さまに深く御礼申し上げます。

学術論文部門受賞

河端 瑞貴

このたびは、地理情報システム学会の学術論文部門賞を受賞し、大変光栄に思います。ご推薦くださいました編集委員会の皆様、これまで共に研究を進めてくださった共同研究者の皆様、そして貴重なご助言をいただきました多くの方々に、心より御礼申し上げます。

私はこれまで、GIS を応用した都市・地域の空間に関わる社会経済問題の研究に取り組んでまいりました。修士課程で初めて GIS に触れ、その可能性と魅力に強く惹かれたことが、私の研究の原点となっています。博士論文では、GIS を活用することで職住地のミスマッチ、いわゆる空間ミスマッチ問題に新たな知見を示すことができました。以降も一貫して、GIS を通じて社会のさまざまな課題を読み解くことに関心を抱き、研究を続けてきました。

具体的には、雇用アクセシビリティにおける交通手段別・地域別の格差、交通環境負荷削減型の都市空間構造、保育所アクセシビリティと女性就業、女性の就業行動と通勤時間、母子世帯の子どもの空間集積パターン、都市防災整備の経済

効果など、多様なテーマに携わってきました。一つ一つに思い入れのある研究を積み重ねてきたことが、このたびの受賞として評価いただけたことは、大きな励みとなるとともに、今後の研究への責任を改めて感じる機会となりました。

今後も、GIS を活用した都市・地域研究をさらに深化させ、社会の実態に寄り添った知見を提示できるよう、研究の幅を広げてまいります。また、当該分野の発展に少しでも貢献できるよう、基礎的な分析手法の改善から応用研究の展開まで、着実に取り組んでまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ソフトウェア・データ部門受賞

龐 岩博

このたびは、地理情報システム学会学会賞（ソフトウェア・データ部門）を賜り、大変光栄に存じます。本受賞の対象となった「擬似人流データ」は、東京大学 CSIS 「人の流れプロジェクト」で整備されてきた人の流れデータの考え方を拡張し、実測データと公的統計を土台に、個人情報に配慮しながら全国の全人口分の動きを合成的に再現したデータセットとして整備してきたものです。実人流データの取得や利用にはさまざまな制約がありますが、その代替として、都市計画、交通、防災などの分野で、研究と実務の両方に使っていただけること、そしてよりオープンに多くの方に利用していただけることを目指してきました。

開発の過程では、全国の自治体やコンサルタント、研究者の皆さまから多くのご意見やご要望をいただきました。精度が十分でない場面や使いにくい点もあり、ご不便をおかけすることもありましたが、そのフィードバックが改良の大きな原動力となりました。現在は、空間分解能や時間分解能、行動パターンの表現などの面で精度向上を進めており、来年度の初め（2026 年 4 月ごろ）には次期バージョンの公開を予定しています。

さらに近年は、データを配布するだけでなく、学術認証フェデレーション GakuNin や MDX と連携し、ブラウザ上でそのままシミュレーションを実行できる環境の構築にも取り組んでいます。擬似人流データを用いて、複数のシナリオを容易に比較し、都市や交通の将来像を対話的に検討できるようにすることが今後の目標です。まだ試行錯誤の段階ではありますが、学会員の皆さまと一緒にこの基盤を育てていければと考えております。

最後になりますが、本プロジェクトをともに推進してくださった共同研究者の方々、人の流れ事務局のメンバー、そして日頃からご利用とご助言をくださっている利用者の皆さまに、あらためて厚く御礼申し上げます。本受賞を励みに、より使いやすく信頼できる擬似人流データの提供に努めてまいります。

ソフトウェア・データ部門受賞

中野 卓

この度、「市区町村別・ハザードエリア内の居住人口等推計データ」という業績によって、ソフトウェア・データ部門での学会賞を授与いただきました。数あるソフトウェア・データの中から本業績を賞に選定いただき、大変光栄に思います。

本研究の実施に当たっては、所属する国立研究開発法人建築研究所および国土交通省国土技術政策総合研究所の関係各位よりご支援を賜りました。ここに記して、感謝申し上げます。

ハザードエリア内の人口分布については、地域の防災計画にとって極めて重要な情報ですので、これまでも GIS を駆使した多数の研究が行われてきました。その際、殆どの研究では「政府統計の総合窓口 e-Stat」等で公開される統計 GIS データが使用されるのですが、こうした統計 GIS では個人情報保護のため、地域単位が小さくなるほど秘匿処理が多く、また使用可能な属性情報が限られる課題があります。いわば「推計精度と属性情報のトレードオフ」が発生する状況にあるわけです。そこで、我々のチームではこの二兎を追う方針、すなわち詳細な境界 GIS データを用いつつも属性情報の多様さを追求する為、統計法に基づき二次利用が可能となっている統計調査の調査票情報に着目しました。現在公開されている最小単位の統計地域区分は国勢調査の基本単位区ですので、これに令和 2 年国勢調査の調査票情報に付属する住所コードを紐づけることで、上記課題をすべて解消した推計手法を確立しました。

これに基づき、土砂災害、津波浸水、洪水浸水の 3 つのハザードエリアに関する GIS データを用いて、ハザードエリア内に居住する年齢別人口や家族構成別世帯数、居住する住宅の別でみた世帯数等、様々な属性別人口・世帯数を集計することができました。この手順については、既に査読付論文誌に公表済みの為、詳しくはそちらを参照いただければと思いますが、「統計の個票」と「最小単位の地域区分 GIS データ」を共に用いた本推計手法は、現段階で実現しうるハザード別人口推計において、最高精度を担保できているのではないかと自負しています。また、市区町村別に集計した本データ（一部、秘匿処理あり）は建築研究所 HP 上で一般公開しており、どなたでも利用可能です。既に国の審議会資料等でも活用いただいておりますが、宜しければ、皆さんの方でも一度ご覧いただければ幸いです。ご利用の際は、「建築研究所 / 災害リスク地域」でご検索ください！

著作部門受賞

桐村 喬

このたびは、このような栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。執筆者を代表して重ねてお礼申し上げます。さて、本書は、地理情報システム (GIS) や地理情報科学についての基礎的な知識をなるべく網羅的にかつ平易な言葉で解説することを主眼に、高校生や大学 1・2 年次生に向けて企画されたものです。14 章の基礎編と 8 章の応用編からなり、GIS と関わりの深い、地理学と都市工学の 5 名の若手・中堅研究者によって執筆されています。GIS や地理情報科学、地理空間情報に関する網羅的な書籍として、浅見ほか編『地理情報科学 GIS スタンダード』（2015 年刊行、古今書院）がすでに刊行されていますが、本書はより入門的な内容・構成となっており、さまざまな事例を図や写真で紹介するだけでなく、第 13 章の「GIS で地域課題を解決しよう」では、会話形式での説明を取り入れるなど、独自の工夫を行っております。これまでに頂いた書評でも、このような工夫を評価いただき、結果として、本書についての今回の賞につながっているものと考えています。書評をご執筆いただいた各先生方に

お礼申し上げます。

本書によって少しでも GIS や地理情報科学の社会への普及や後進の育成のために貢献できれば、著者一同この上ない喜びですし、今後もさまざまな活動に取り組んでいければと存じます。このたびは地理情報システム学会賞を授与いただき、誠にありがとうございました。

実践部門受賞

高田 祐一・武内 樹治

この度、実践部門賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。

奈良文化財研究所は文化財を総合的に研究するための機関であり、全国の文化財に関する情報を収集し、整理し公開する役割があります。そのうち文化財情報研究室は特に文化財情報電子化の研究および必要なシステム構築についての研究を行っております。その一環として、発掘調査報告書をはじめとする文化財報告書や情報資源に関するデータベースである「全国文化財総覧」や、文化財情報を地図上で閲覧できる「文化財総覧 WebGIS」を公開しております。

さらに、地方公共団体等の文化財担当職員向けに遺跡情報と GIS に関する研修の企画・実施、さらに研修内容の研究所紀要への掲載・公開を行っており、GIS・地理空間情報に関する知識の普及に貢献しております。研究面としても、高精度地形データを用いたデジタル踏査の方法論の確立や、ハザードマップと文化財情報を組み合わせた文化財リスクに関する調査を行っており、文化財保護に貢献できるものを提供できるように努めております。

文化財情報の整備や登録については、全国の文化財行政や文化財関係の研究に勤しむ皆さまのご協力やご理解があって成し遂げられているものであります。また、文化財や遺跡の研究において地形をはじめとする地理空間情報は欠かせないものです。行政機関、研究機関、市民団体、さらには個人の有志の方々が公開してくださっているデータは、研究の基盤であり、新たな知見を生み出す源泉でもあります。質の高いオープンデータが広く共有されていることで、学際的な連携や再現性の高い分析が可能となり、我々の研究もその恩恵を大いに受けました。こうしたデータ公開に携わるすべての方々に、改めて深く敬意と感謝を申し上げます。

引き続き、ご指導、ご協力を賜りますよう、よろしく願いいたします。

第 21 回大会優秀発表賞

大会優秀賞選考報告

学会賞委員会委員長 井上 亮

大会優秀発表賞は、学生の研究発表を奨励し、発表の質の向上を図るため、2005 年に設けられました。今年度は 45 件の発表に対し、司会者や審査員による審査に基づき、以下の 10 名が受賞しました。

セッション順/敬称略(所属)「論題」

白石 彩乃(摂南大学)「土地利用の変遷に着目した局所人口分布の空間変動の分析」
 式見 悠一郎(東北大学)「外邦図の画像識別による朝鮮半島の環境変遷の分析」
 橋本 蒼真(東京科学大学)「ビーコンデータを用いた大学病院勤務医の滞留・移動分析」
 齋藤 開(東京都市大学)「オープンデータを用いた戸建て住宅の分布推定手法の開発」
 竹内 真雄(筑波大学)「多世代の位置情報に基づく滞在集積の時空間分布と年代間相関」
 青木 日花(筑波大学)「立地アメニティとオフィス賃料—オフィスビルにおける交通利便性の再考—」
 小松 なのか(東京科学大学)「密集市街地で撮影した街路全方位画像の位置情報補正手法—建物外観画像の効率的収集に向けた検討—」
 釜谷 紘生(筑波大学)「マニラ首都圏における洪水リスクが不動産賃料に与える影響の分析—賃料帯の異質性に着目して—」
 原田 慶紀(東京科学大学)「街路印象評価に対する空間構成要素の質的影響」
 大村 碧(東京科学大学)「携帯電話位置情報データを用いた滞留施設・滞留目的の推定手法」

受賞者の皆様、おめでとうございます。また、審査をご担当いただいた各セッションの司会者ならびに審査員の皆様に厚く御礼申し上げます。



大会優秀発表賞の受賞者

第14回ポスターセッション賞

ポスターセッション賞選考報告

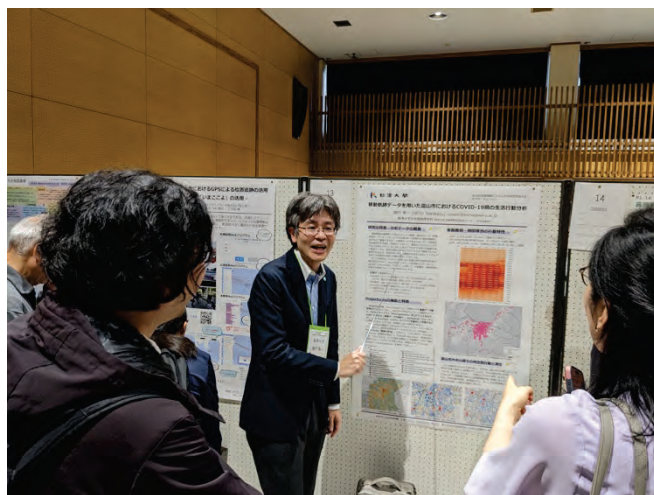
学会賞委員会委員長 井上 亮

ポスターセッション賞は、ポスターセッションの活性化を図るため、2012年度に設けられました。今年度は代議員による評価に基づき決定しました。97件の発表から、以下の10

ポスター番号順/敬称略(代表者所属)「ポスタータイトル」

寺田 遣都、清水 貴仁、秋山 祐樹(東京都市大学)「街路景観画像と深層学習を用いた不動産価格の自動評価手法の開発」
 山田 拓弥、沖 拓弥(東京科学大学)「連続的な空間体験を考慮した建物内部空間の印象評価予測モデル」
 金 炫禎(株式会社地域環境計画)「都市近郊森林の環境評価:豊田市自然観察の森を対象とした多面的機能の定量分析」
 松本 直樹、河端 瑞貴、直井 道生、森岡 渉、今中 雄一(慶應義塾大学)「平均寿命と健康寿命の地域的・社会的要因分析」
 佐藤 将、深見 奈緒子、熊倉 和歌子(金沢星稜大学)「歴史都市カイロの地図データベースの整備と都市空間の特徴」
 岸本 慧大(兵庫県立大学)「人流データを用いた孤立・孤独状況に伴う外出行動の解明」
 吉田 崇紘、山田 育穂(東京大学)「組成データのための空間統計量の提案」
 早坂 遼、堤 盛人(筑波大学)「東京国際空港新飛行経路による不動産価値への影響分析のための広域騒音推計」
 沖 拓弥(東京科学大学)「実人流データに基づく商店街のにぎわいの特徴分析:東京都大田区を対象としたケーススタディ」
 秋山 祐樹、秋山 千亜紀、水谷 昂太郎、清水 貴仁(東京都市大学)「都市多様性指標(UDI)による世界280都市の多様性評価と日本の主要都市圏への適用」

受賞者の皆様、おめでとうございます。また、評価していただいた代議員の皆様に厚く御礼申し上げます。



ポスターセッションの様子



ポスターセッション賞受賞者の写真

【事務局からのお知らせ】

■ 事務局休室のお知らせ

年内の事務局業務は、12月26日（金）までです。年明けは、1月5日（月）から通常業務となります。みなさま、良いお年をお迎えください。

■ 会員登録変更・退会等について

現在の会員登録の状況は、学会 WEB ページの会員専用ページから、ご自分で確認・変更することができます。年度は毎年、4月1日から翌年3月末日までです。今年度一杯で退会希望の方は、2026年3月末日までに手続き完了が必要です。（2026年4月1日から、新年度の学会費が発生します）また、学生会員は2026年度（4月1日以降）に入りましたら、学生証のコピーの提出が必要です。次号で詳しくご案内します。

■ 委員会、支部、分科会への Zoom の権限貸与について

本学会では、学会活動を活発化するために、各委員会、支部、分科会の会議に限り、学会事務局の Zoom の権限を貸与します。ご希望の方は、以下のルールに従ってお申込みください。

1. 事務局に原則として1週間前までに事前申請する。
2. 会議の設定・開催は各グループの自由裁量とする。
3. ホストのグループを明示する。
4. 会議終了後には、開催記録（開催日時、参加者等）の基本情報を事務局に報告する。
5. 会議は必ずパスワード付きで開催し、第三者には明かさない。

■ メールニュース受信についてお願い

Bcc または配信先が多数のメールを受信できない設定の企業等団体の方で、学会メールニュースをお読みにになりたい方は、個人のメールアドレスを事務局までお知らせください。また、アドレスが変更になった場合は、会員ページよりご変更をお願いいたします。

■ メールニュースへの掲載ご希望の方へ

学会では個人会員を対象に、メールニュースを配信しています。内容は学会からのお知らせ、関連イベント、公募情報が主ですが、掲載をご希望の方は、事務局までご連絡下さい。なお、ニュースの配信は、毎月第2・第4金曜日を目安にしています。

■ 2025 年度に付与できる CPD ポイントについて

当学会で、今年度付与できる測量 CPD 学習プログラムのポイントは以下のとおりです。

【第34回研究発表大会（発表）】：

発表者：2ポイント/件

発表に係る審査：1ポイント/時間

受賞：2ポイント/件

【PLATEAU アカデミー】

聴講：10ポイント/件

【公開型情報交換会】

聴講：2ポイント/件

【『GIS-理論と応用』年間購読】：3ポイント/年

【『GIS-理論と応用』への執筆活動】：

・査読付原著論文

（原著論文、展望論文、データ論文、ソフトウェア論文、研究・技術ノート）

筆頭著者：5ポイント/件

共著者：2ポイント/件

・技術報告（査読付/査読なし）

（シンポジウム報告、評論・解説、討論・書評・製品評価、学会記事他）

筆頭著者（査読付）：3ポイント/件

筆頭著者：2ポイント/件

共著者：1ポイント/件

記事執筆：1ポイント/件

2025 年 10 月 31 日現在の個人会員 1,063 名、 賛助会員 48 社

賛助会員

アジア航測株式会社, アドソル日進株式会社, 株式会社インフォマティクス, エアロトヨタ(株), ESRI ジャパン株式会社, NEC ソリューションイノベータ株式会社, 応用技術株式会社, 大阪土地家屋調査士会, 株式会社かんこう, 関東中部 G 空間情報技術研究会, 岐阜県建設研究センター, NPO 法人九州 GIS 研究会, 近畿北陸 G 空間情報技術研究会, 経済産業省特許庁, 株式会社こうそく, 国際航業株式会社, 国土交通省国土地理院, 国土交通省不動産・建設経済局地理空間情報課, 国土情報開発株式会社, 株式会社古今書院, 一般社団法人 GIS 支援センター, ジェイアール西日本コンサルタンツ株式会社, 株式会社ジオテクノ関西, ジオテクノロジー株式会社, 株式会社ゼンリン, 総務省統計局・統計研究所, 中四国 G 空間情報技術研究会, 特定非営利活動法人デジタル北海道研究会, 株式会社東京地区研究社, 独立行政法人統計センター, 東北 G 空間情報技術研究会, 株式会社ドーン, NPO 法人長野県 G 空間情報技術協会, 日本工営都市空間株式会社, 一般社団法人日本情報経済社会推進協会, 日本スーパーマップ株式会社, 公益社団法人日本測量調査技術協会, 日本地区センター, 一般社団法人日本デジタル道路地図協会, パシフィックコンサルタンツ株式会社, 株式会社パスコ, 福岡県直方市, 北海道 G 空間情報技術研究会, 株式会社マップクエスト, 株式会社マップル, 株式会社松本コンサルタント, 三菱電機株式会社, 一般社団法人リモート・センシング技術センター

学会分科会連絡先一覧

- | | |
|---|--|
| <p>■自治体：小泉和久（千葉県浦安市）
事務局：青木和人（あおきgis研究所）
Tel：050-5850-3290
E-mail：kazu013057@gmail.com</p> <p>■FOSS4G：Venkatesh Raghavan（大阪市立大学）
連絡先：嘉山陽一（朝日航洋(株)）
Tel：049-244-4032
E-mail：youichi-kayama@aeroasahi.co.jp</p> <p>■若手分科会：関口達也（京都府立大学）
Tel：075-703-5428
E-mail：ta-sekiguchi@kpu.ac.jp</p> | <p>■GeoAI：巖網林（慶應義塾大学）
Tel：0466-49-3453
E-mail：yan@sfc.keio.ac.jp</p> <p>■地理情報標準調査会：村上 広史（青山学院大学）
事務局長：太田守重（国際航業株式会社）
Tel：03-5656-8685
E-mail：morishige_ota@kk-grp.jp</p> |
|---|--|

地方支部の連絡先一覧

- | | |
|---|--|
| <p><北海道支部>
支部長：株式会社ドーコン 三好達也
連絡先：NPO 法人 Digital 北海道研究会（内）
Tel：011-299-8104,
E-mail：gisahokkaido@dghok.com</p> <p><東北支部>
支部長：東北大学 井上亮
Tel：022-795-7478,
E-mail：rinoue@tohoku.ac.jp</p> <p><中部支部>
支部長：中部大学 福井弘道
連絡先：杉田暁（中部大学） Tel：0568-51-9894,
E-mail：satoru@isc.chubu.ac.jp</p> <p><関西支部>
支部長：大阪工業大学 田中一成
Tel：06-6954-4293,
E-mail：gisa@civil.oit.ac.jp</p> | <p><中国支部>
支部長：広島修道大学 川瀬正樹
Tel：082-830-1210,
E-mail：kawase@shudo-u.ac.jp</p> <p><四国支部>
支部長：高知工科大学 赤塚慎
Tel：0887-57-2500,
E-mail：akatsuka.shin@kochi-tech.ac.jp</p> <p><九州支部>
支部長：九州大学 三谷泰浩
Tel：092-802-3399,
E-mail：gisaku@doc.kyushu-u.ac.jp</p> <p><沖縄支部>
支部長：沖縄国際大学 崎浜靖
E-mail：sakiham@okiu.ac.jp
連絡先：澤岬直彦（NPO 法人沖縄地理情報システム協議会）
Tel：098-863-7528,
E-mail：takushi7015keisayasaki@gmail.com</p> |
|---|--|

■ 編集後記 ■

今号のニューズレターは、馬場と岸本のコンビで編集を担当いたしました。

10 月に開催された研究大会の報告特集、お楽しみいただけましたでしょうか。富山大学五福キャンパスを舞台に、活発な議論が交わされ、非常に刺激的な場となりました。各セッションの報告文から、現地での熱気や会場の雰囲気を少しでもお伝えできていれば幸いです。懇親会では、富山の美味しい海鮮と日本酒を楽しみながら多くの方と交流でき、実りの多い時間でした。この場を借りて、開催校の皆様、大会実行委員の先生方に心より深く感謝申し上げます。

来年度、東京科学大学大岡山キャンパスで皆様にお会いできることを、心より楽しみにしております！

（中央大学 馬場、東京科学大学 岸本）

地理情報システム学会ニューズレター

第 136 号 ●発行日 2025 年 12 月 25 日

■発行

一般社団法人 地理情報システム学会

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル（株）毎日学術フォーラム内

一般社団法人地理情報システム学会事務局

TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555

E-mail: maf-gisa@markmynavi.jp

URL: <http://www.gisa-japan.org/>